

【原著論文】

モンゴル民族の伝統芸能
ーホーリンウリゲルの起源と発展に関する考察ー

モンゴルジンフー
蒙古貞夫*

摘要

ホーリンウリゲル (1) という伝統芸能は、東部モンゴル地区に住むモンゴル人に対して、ただ農閑期の主要な娯楽活動ではなく、自民族およびほかの兄弟民族の歴史や文化を理解する主な手段でもあった。そこで、ホーリンウリゲルの起源と発展について検討して、この芸能が実際に発生した時期および発展過程を明確することが大きな意義がある。しかし、ホーリンウリゲルの成立について慎重に分析すると、この芸能がモンゴル英雄叙事詩やマングスインウリゲルやベンスンウリゲルなどの説唱芸術の要素を吸収したことおよびその説唱方法や伴奏楽器も長い歴史の中で変化してきた経緯を確認できるので、研究者がホーリンウリゲルの起源と発展に様々な観点を出している。本研究では、ホーリンウリゲルの起源と発展に関して考察を行い、この芸能の起源期および発展してきた脈絡を検討し、ホーリンウリゲルの研究により精緻な理論根拠を提示する。

1. 問題の提起

本研究の分析対象となるホーリンウリゲルは、モンゴル民族を代表される伝統的な芸能（説唱芸術）として、チンギス・ハーンの時代に発生して以降、長い歴史の中で語り手であるホールチ (2)（語り手）の語り継ぐことによって、その歌声が古代から今日までに、モンゴル人の中で代々伝えられてきた。しかし、実際にホーリンウリゲルを継承しているホールチたちが信じている「アラガソン・ホー

* 東京学芸大学大学院・院生

ルチ」の伝説について、研究者の間で異なっている様々な意見が出され、今日までに一致していないというのが現状である。

そして、これまでホーリンウリゲルの起源に関する諸観点をまとめると、一部の研究者は、チンギス・ハーンの時代にホールを弾きながら当時の様子と状況に応じてウリゲルを語る「アラガソン」（阿日嘎聡）という「ホールチ」が活躍していた記録があったので、口述史の視点から分析すると、ホーリンウリゲルは800年以上の歴史を持つと認識しており、もう一部の研究者は、各歴史時代の政治制度と社会環境を考慮した上で、ホーリンウリゲルはチンギス・ハーンの時代に発生したのではなく、明代や清代で形成したと認識している。

そこで、本稿では、上述した研究背景を基にして、これまでの起源研究であまり使用・公開されなかった史料を使って、ホーリンウリゲルが実際に発生した時期を明確するほか、さらには多量の郷土資料を用いて、ホーリンウリゲルの発展過程を整理・分析して、ホーリンウリゲルはモンゴル英雄叙事詩を基に、マングスインウリゲルとベンスンウリゲルの要素を吸収してから現在のような上演形式に定型した経緯を論証したい。

2. ホーリンウリゲルの緒起源説とその具体内容

2. 1 12世紀から13世紀の起源説

ホーリンウリゲルは12世紀から13世紀に発生したという観点を指している研究論文として、バヤナ（巴雅納）氏の「浅談胡仁烏力格尔と胡尔奇」、アラタンルバガナ（阿拉坦巴根）氏の「浅谈胡仁烏力格尔の起源と発展」、ナリス（納日蘇）氏の「浅谈蒙古贞胡仁烏力格尔」、リンチンドルジ（仁欽道尔吉）氏の「胡仁烏力格尔初探」、メェディリレト（莫德日勒図）氏の「关于胡仁烏力格尔」、ロソル（劳斯尔）氏の「关于胡仁烏力格尔の起源発展と特徴」などの研究論文が見つかった。

これらの論文に記述されている内容によると、「モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、12世紀から13世紀に発生したことは史実であり、当時の吟遊詩人はホーリンウリゲルの前身と呼ばれているトゥリ（モンゴル英雄叙事詩）を語っていた。それゆえに、現在までに継承されてきたホーリンウリゲルは、モンゴル民族の古代英雄叙事詩からの強い影響を受け、さらには古代英雄叙事詩や伝記伝説を基にして発生した」という点で研究者の見解は一致している。

この中で2006年に国家級非物質文化遺産「蒙古族烏力格尔」項目の伝承に任命されたロソル（勞斯尔）氏は、長い間にホールチとしてホーリンウリゲルを披露しながら、研究者としてもホーリンウリゲルの起源を研究してきたので、論文の「胡仁烏力格尔の起源・発展と特点」には、「紀元7世紀およびそれより最も前の時期に、四つの弦を持つ「ホール」（胡尔）という楽器が既に発生していた。

そして、13世紀に至って来ると、モンゴルは益々のご活躍・発展する時期を迎えてきたため、胡尔（胡琴とも呼ぶ）で伴奏しながらモンゴル民族のウリゲル（物語）を語る上演形式がモンゴル人の中で広く伝播し、同時期には、『モンゴル秘史』のような大規模な文学作品が創作された。また、フビライ・ハーンの元朝にモンゴル民族の伝統音楽をもとに創作された「元代散曲」「元雜劇」が形成されたことなど、一連の条件を根拠にすれば、ホーリンウリゲルは13世紀に起源したことが確認できる」とある。

2. 2 16世紀末期から17世紀初期の起源説

紀元16世紀から17世紀までの時期には、モンゴル人の北元政権と漢人の明朝政権が同時に存在し、対立することが多く、平和は少なかったが、そのような戦争が継続していく中で、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、どのような状態だったのだろうか。この時期の史実についてはチン・タナ（秦・塔娜）氏とテェ・タリバ（特・塔日巴）氏の共著「関于旧蒙古説書の起源及其他」という研究論文が挙げられる。

両氏はこの論文において、まず、現在のホーリンウリゲルという説唱芸術は、チョール（潮尔）という楽器を伴奏しながら英雄叙事詩を語るマングスインウリゲルの影響を受けて発展したと解説している。次に、時代の変遷に伴ってマングスインウリゲルという説唱芸術は衰退し、聴衆が急に減少してしまったが、ちょうどこの時期にホーリンウリゲルという新しい説唱芸術が登場してきて、マングスインウリゲルを取って代わったとしている。

また、この論文では、1856年から1930年の間に生きていたモンゴルジン（蒙古貞）旗出身のバダラホ（巴達日呼）・ホールチは、著者であるテェ・タリバ（特・塔日巴）の曾祖父であったが、「関于旧蒙古説書の起源及其他」という論文の著者の記憶によると曾祖父バダラホは、年とってもモンゴルジン旗のモンゴ

ル族の村落を回ってホーリンウリゲル説唱していたとしているので、ホーリンウリゲルは16世紀末期から17世紀初期の間に発生したという結論を導いている。

ホーリンウリゲル研究者・サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏は、「史詩・好来宝・胡仁烏力格尔」、「広播電台中播放的胡仁烏力格尔」、「本子故事与胡仁烏力格尔研究」の研究論文で、「ホーリンウリゲルというモンゴル民族の伝統的な口承文芸は、既に清朝・康熙帝八年（1669）あるいは十四年（1675）の時期にジョソト（卓索図）盟・モンゴルジン（蒙古貞）旗の民間で演じられていた」と記述しており、300年前のモンゴルジン旗にホーリンウリゲルという説唱芸術が存在していたので、17世紀に発生したという見方を出している。

2. 3 17世紀末期から18世紀初期の起源説

この起源説について、ホーリンウリゲル研究者のチョコトウ（朝克圖）氏は『胡仁烏力格尔研究』という著作で、まず、2002年までの国内外のホーリンウリゲル研究者による著作や論文を整理して分析を行った。彼は、それまでの国内の研究者による4つの起源説を要約して分析し、ホーリンウリゲルは12世紀から13世紀、16世紀末期から17世紀初期、18世紀の中期、19世紀の中期に起源する可能性は低いと断言し、上記の4つの説が成立しない理由を述べている。

彼は、ホーリンウリゲルの発祥地として多くの研究者に認定されているモンゴルジン旗を対象に、当該地域のモンゴル族の村落に住んでいる民間芸人や小説家などの人にフィールド調査を実施したと陳述し、さらにそれらの協力者から貰ったモンゴルジン旗のホーリンウリゲルに関する一次資料をもとに、清朝時期のジョソト盟・トゥメット左旗、即ち、モンゴルジン旗の歴史、当時の社会環境、無数のホールチが育成されたことを紹介している。

そして、清朝時期に多くの漢文で書かれた古書や書籍や歴史小説がモンゴル文に翻訳されたため、ホーリンウリゲルは17世紀の末期から18世紀初期に発生したという私見を示している。

2. 4 18世紀中期から末期の起源説

紀元18世紀には、蒙漢両族の文化は従来になかったような接触・交流の時期を迎えた。その中で「蒙漢文学」と「蒙漢書籍の翻訳」が一時的に盛んになり、ホ

ーリンウリゲルの形成にもかなり影響を与えた。ホーリンウリゲル研究者のア・バダラフー（阿・巴達日呼）氏は、「琶傑胡尔齐談胡仁烏力格尔」という研究論文を書いて、パジェ（琶傑）・ホールチの生涯、説唱の風格、伝承系譜の関係、ホーリンウリゲルの起源などを紹介している。

モンゴル国の研究者デェ・ツェレンソデナム（達・策仁蘇徳那木）氏は、学部時代からホーリンウリゲルに関する史料・資料を収集する作業を開始し、手元にあったデータを整理して、当時の内モンゴル大草原で大活躍していたモーイホン（毛依罕）・ホールチの創作した『フレルバートル』（胡日勒巴特尔）という物語を書籍にまとめて分析している。加えて、1968年には、「漢文小説在蒙古地区的伝播」という論文で、ホーリンウリゲルの内容形式、伝播範囲、継承状況について厳密な分析を行い、ホーリンウリゲルという伝統芸能は現在までに200年あるいは300年の歴史を持つという結論を出している。

また、それ以降も、チムディンドルジ（斉木徳道尔吉）氏の「浅談蒙古族説唱芸術的産生和発展」、ホージンシァン（胡金山）氏の「蒙古人的伝統文芸胡仁烏力格尔」、ホーゲジホ（呼格吉胡）氏の「蒙古民間的胡仁烏力格尔」といった研究論文が発表された。これらの研究によると、ホーリンウリゲルは18世紀中期から末期に発生したと考えられる。

2. 5 19世紀中期の起源説

周知のように、19世紀の中国では「日清戦争」が勃発したために、清朝の内部に「維新派」と「保守派」の2つの勢力が形成され、当時の清朝政府が実施していた政策を改革するかどうかについて、お互いに激しく抗争していた。こんなような社会環境にあって、説唱芸術のホーリンウリゲルにはどのような変化があったのかという問いを持って、ホーリンウリゲルの起源に関わる先行研究を検討していくと、ボルジギン・ハスシウグイ（孛兒只斤・哈斯西貴）氏の「關於蒙古族胡仁烏力格尔及音樂之探究」、チェジガワ（却吉嘎瓦）氏の「關於胡尔及胡尔齐」といった論文が浮かび上がってきた。

これらの研究者は、ホーリンウリゲルの起源に関する意見はかなり異なっているが、一部の研究者は、「これまでに掘り出された史書や書き出した史料の中に、元祖ホールチと称されているダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチは、1836年に

生まれて 1889 年に逝去したので、ホーリンウリゲルは 19 世紀の中期あるいはそれよりもっと後の時期に発生した」としており、別の一部の研究者は、「ホーリンウリゲルはモンゴル民族英雄叙事詩および好来宝をもとにして、長い歴史の中で他の民族の優秀な文化要素を吸収して形成された独特な説唱芸術であるが、現在までに長くても 150 年の歴史を持つに過ぎない」という結論を出している。

2. 6 ホーリンウリゲルの起源に関する私見

現在の学術研究界では、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルの起源について、上述したような 5 つの観点があるが、諸起源説に対して慎重に考察を行うと、12 世紀から 13 世紀にこの芸能の淵源を見ることができ、やがてホーリンウリゲルが成立し、繁栄を経て衰退し、現在のようになったと包括的に考えることができるのではないかと考えた。以下、その理由を述べていきたい。

第一は、チン・タナ（秦・塔娜）氏とテェ・タリバ（特・塔日巴）氏は、著者のテェ・タリバ（特・塔日巴）が自分の曾祖父であるバダラホ・ホールチ（1856～1930）は、年とってもモンゴルジン（蒙古貞）旗のモンゴル族の村落を回ってホーリンウリゲル説唱していたことを根拠にして、ホーリンウリゲルは 16 世紀末期から 17 世紀初期の間に発生したという結論を出したが、19 世紀に活躍したホールチの動向を根拠にして、ホーリンウリゲルが 16 世紀末期から 17 世紀初期に発生したと判断するのは歴史的・学術的な根拠が足りない。

また、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏、ウ・シンバヤル（呉・新巴雅尔）氏、ボインヘシゲ（宝音賀希格）氏、テェグスバヤル（特古氏巴雅尔）氏は、明朝と清朝の時期に、多量の漢文漢籍がモンゴル語に翻訳されたことによって、その時代に蒙漢文化がかなり交流・融合したので、ホーリンウリゲルという伝統芸能は清朝より前の時期に発生したという観点を出しているが、漢文化の影響を強調して、モンゴル族が有する英雄叙事詩の影響を弱く考えるのは、ホーリンウリゲルという伝統芸能の基盤を無視することになる。

第二は、チョコトウ（朝克図）氏は、ホーリンウリゲルが発生した地域として公認されているモンゴルジン旗の社会環境および文化要素を分析した上で、17 世紀末期から 18 世紀初期に蒙漢両族の経済融合と文化交流が盛んになってきたので、ホーリンウリゲルはこの時期に発生したという結論に導いた。しかし、明朝

や清朝の時代に多くの漢文漢籍がモンゴル語に翻訳されたとしても、その後の変遷や視聴者の好感度によって民間芸人がリズムを入れて語るようになったので、むしろ、この時期にはヤバガンウリゲルが盛んになっていたと言うのが最も適切ではないかと考える。

第三は、ア・バダラフ（阿・巴達日呼）氏を主とするホーリンウリゲル研究者は、清朝の蒙地開墾という政策によって、漢人の東部モンゴル地区への入植が激しくなったので、ホーリンウリゲルという伝統芸能は18世紀中期から末期に発生したという観点を出した。しかしながら、この時期にはベンスンウリゲルが発展する時期を経て、次第に視聴者が減少しつつあり、ホールチが低音のドウリボン・ウタスト・ホールを自ら弾いてモンゴル語でウリゲルを語り始めたので、ホーリンウリゲルの上演形式はこの時期にジョソト盟・トウメット左旗で成立したと言える。

第四は、ボルジギン・ハスシウグイ（孛兒只斤・哈斯西貴）氏を主とするホーリンウリゲルの研究者は、これまでの史料の中に、元祖ホールチと称されるダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチは1836年に生まれて1889年に逝去したので、ホーリンウリゲルは19世紀の中期あるいはそれよりもっと後の時期に発生したという観点を出したが、この観点が成立する余地はない。なぜかというところ、ダンスンニマ・ホールチが初めて語った脚本は長編章回体の歴史小説『興唐五伝』であるが、この『興唐五伝』の作者であるエンケテグスも当該時期の有名なホールチであったので、ダンスンニマがエンケテグスから『興唐五伝』の説唱方法を学んだことは考えられるが、逆にエンケテグスが自分で創作・改編・説唱した『興唐五伝』をダンスンニマから学ぶということは考えられない。

そこで、まず、ホーリンウリゲルが12世紀から13世紀に淵源を持つことを支持する幾つかの理由を述べていきたい。まず、東部モンゴル地区では、ホールチと言えはホール（12世紀から13世紀の時期に「ホール」という言葉は、モンゴル民族が有するすべての楽器を指す総合的な呼称であったが、18世紀末期から19世紀初期にその指向性が変化し、「ホール」と言えは四つ弦を持つ低音のドウリボン・ウタスト・ホールを指すことになるが、わざわざドウリボン・ウタスト・ホールと正式に呼ぶホールチは極めて少なかったので、「ホール」という呼称が現在までに継承され、一般的に「ホール」という言葉の前に「〇〇ホール」と呼び、

なく、関連する『モンゴル源流』と『モンゴル黄金史綱』のような史書にも既に記録されていたことが分かるので、『漢訳モンゴル黄金史綱』より前に記録・出版された著作にあった可能性が高い。

ツェ・ダムディンスレン氏は、『モンゴル古代文学一百編』で、1240年に書かれた史書『モンゴル秘史』を「モンゴルの英雄叙事詩」と比較して研究した後、『モンゴル秘史』に13世紀以前の英雄叙事詩が大量に引用されていることを明らかにし、『モンゴル秘史』に使われている散文体と韻文体の書き方は、英雄叙事詩の韻文体や書き方とあまり変わらないという見方を示し、『モンゴル秘史』は古代の英雄叙事詩を語っていた説唱芸人が創作した可能性が高いと述べた。

上述の史書や史料に記録されていた内容によると、12世紀から13世紀にチンギス・ハーンのモンゴルハーン国でアラガソンのようなホールチが活躍していた史実が確かめられるほか、その時代の吟遊詩人たちの説唱技術や創作能力は非常に高いレベルに達したという事実も確認できる。しかし、残念なことには、モンゴル語で「ホール」（胡尔）と呼ばれている楽器は、その時代から20世紀の末期までモンゴル民族が有しているすべての楽器を指す総称であったので、アラガソン・ホールチが実演する時に使われていた楽器（ホール）は、英雄叙事詩を語る時に使うチョール（潮尔）を指しているのか、あるいは、現在のホールチたちが使っている四つ弦を持つドウリボン・ウタスト・ホールを指しているのかははっきりしない。

そこで、ホーリンウリゲルの形成過程を分析することを通して、各時期にモンゴルの吟遊詩人が使っていた楽器の実態を明確にし、さらには吟遊詩人が説唱する内容の変化によって、もともとトゥブシュリ（托布秀尔）を使っていたのがチョール（潮尔）を使うようになり、楽器を使わない特殊な時期を経て、現在のドウリボン・ウタスト・ホールを使うように変化した経緯を示したい。

3. ホーリンウリゲルの発展過程

3. 1 モンゴル英雄叙事詩の誕生と変化

ホーリンウリゲルの発展に関しては、上述した起源と一様で、研究者の専攻や視点が異なることによって、様々な形式で記述されていることが現状である。そこで本稿で筆者は、子どもの頃から学んできたホーリンウリゲルの曲牌と詞牌を

基にして、さらにはこれまでに蓄積してきたホーリンウリゲルに関する知識を活かして、現在のホーリンウリゲルという伝統芸能は、モンゴルの古代英雄叙事詩からマングスインウリゲル、マングスインウリゲルからベンセンウリゲルが出現してから現在の上演形式に定型した発展脈絡を論証する。

モンゴル語で「英雄叙事詩」という言葉を表現すると、「ᠪᠠᠭᠠᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» (バガトリイグ・トゥリ) のように表記されるが、もともとのモンゴル人が生活している地域では、英雄叙事詩を語ることを「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ ᠬᠠᠢᠷᠠᠬᠤ» (トゥリ・ハイラホ) と呼ぶのは当然のことである。モンゴル語で言う「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» (トゥリ) という言葉は、いったんどのような意味を持つのかを知るために、『蒙漢辞書』を調べると、「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» は (名詞) <文>① 史詩、英雄史詩 (史詩、英雄叙事詩)、② 历史故事、叙事詩 (歴史故事、叙事詩)」のような解説があった。そこで、言葉として「トゥリ」、即ち「英雄叙事詩」を理解すると、英雄叙事詩とは長編叙事詩のことを指すことが確認できる一方で、モンゴルの英雄叙事詩には英雄叙事詩と歴史故事の2つのジャンルが含まれていることも分かる。

モンゴルの伝統的な説唱芸術であるトゥリ(陶力)を語る語り手のことは、「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» (トゥリチ)、あるいは、「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» (トゥリチン) と呼ばれ、さらに『蒙漢辞書』では、「ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ ᠲᠤᠷᠢᠭᠦᠨ» は (名詞) 编写英雄故事的作家、说唱英雄故事的艺人 (英雄故事を創作する作家、英雄故事を説唱する芸人)」と解説している。歴史上に登場した「トゥリチ」(陶力沁) たちは、ただ物語を語る能力を持つだけでなく、説唱する英雄叙事詩と歴史故事の脚本を創作する能力も高かったことが確認できる。

モンゴル民族には、『モンゴル秘史』『ジャンガル・ハーンの世界』『ゲセル・ハーンの世界』の三大の長編英雄叙事詩があるほか、現時点で掘り出し・保存されている中編英雄叙事詩および短編英雄叙事詩も、合計550編以上あることが、リンチンドルジの『蒙古英雄叙事詩源流』という著作で確認できる。これらの長編英雄叙事詩は、原則として必ずモンゴル語で語る必要があり、それは上演方式によって、「語るだけで歌わない」「語りながら歌う」「歌うだけで語らない」という3つの形式に分けられるが、この中では「語りながら歌う」と「歌うだけで語らない」という2つの形式が頻繁に使われている。

また、モンゴル研究の大家であるツェ・ダムディンスレン氏の『モンゴル族文学史概況』によると、トゥリには、上記の3つの上演方式以外に、民間芸人が木

材と石のようなものを敲き、それで出た綺麗な音を伴奏楽器として使って長編英雄叙事詩を語る上演方式があったが、芸人たちはこのような上演方式を「敲きトゥリ」と呼んでいた。これらの史料によると、モンゴルのトゥリは悠久の歴史を持つことが推測されるほか、その上演方式も昔から多種多様であったことが想像される。

モンゴルの英雄叙事詩に関する研究は、各国の研究者の中で国際モンゴル学研究の一環として重要視されてきたが、実際に発生した時代および地域に関しては明確にされていないのが現状である。例えば、これまでの先行研究を整理すると、研究者が各々の視点からモンゴル英雄叙事詩を分析した結果は、7世紀前後の時期、10世紀前後の時期、12世紀から13世紀前後の時期に発生したという起源説が挙げられる。この中では、7世紀前後の時期に発生し、12世紀から13世紀までに成熟したという観点は信憑性が高いと考えられ、多くの研究者が認めているのである。

特に説明する必要がある研究事情は、長編英雄叙事詩の『ジャンガル・ハーン物語』と『ゲセル・ハーン物語』の2つの英雄叙事詩が世界各国の研究者に注目されて以来、長年にわたって国際的な視点からの研究成果が出されてきて、現在は「ジャンガル学」と「ゲセル学」という2つ研究学科として独立している。

もうひとつの英雄叙事詩である『モンゴル秘史』に関しては、現時点でモンゴル民族の歴史・政治・経済・文化・芸術・言語・儀礼などを研究する際に、必要不可欠な1冊と見なされ、重要な資料として活用されているほか、各国の研究者による『モンゴル秘史』の研究も史学・歴史学・民俗学・文化人類学・言語学など様々な視点で進められ、貴重な成果が挙げられている。日本人では、村上正二氏の訳注『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』（第1部から第3部まで）は、日本のモンゴル研究およびモンゴル英雄叙事詩研究において高く評価される一方、モンゴルの歴史と文化を研究する際にも重要な資料としての位置を占めてきた。

モンゴルの英雄叙事詩は、雄大なモンゴル文学に所属するジャンルの一種であり、一般に英雄人物の事績を褒め称える長編韻文体の文学作品を指している。そして、モンゴルの英雄叙事詩はその作品の長短によって長編・中編・短編に分けられるが、すべての英雄叙事詩は「叙事性が強い」という特徴を共通に持っている。特に、モンゴルの英雄叙事詩の場合、各作品の中に多量の誇張・比喻・擬人

法が使われ、登場人物・戦争場面・物語内容を聴衆に伝えている。

上述した『ジャンガル・ハーン物語』『ゲセル・ハーン物語』『モンゴル秘史』は、文体の種類に沿って分類すると、すべて長編の英雄叙事詩（ホーリンウリゲルの場合は長編の脚本）となる。実は、モンゴルの英雄叙事詩には、長編の作品（脚本）以外に中編および短編の作品（脚本）も多量に残されているが、最も歌い広められている作品（脚本）は、『マングスを鎮圧する故事』と『ハーンチングレ』などの英雄叙事詩である。

これらの長編・中編・短編の英雄叙事詩は、英雄叙事詩を語る「トゥリチ」（陶力沁）が必要不可欠な説唱脚本であるわけではなく、19世紀後半期には、ホールチの説唱する主な脚本として大変人気のあるものとなっていた。例えば、20世紀の東部モンゴル地区では、有名なパジェ・ホールチの説唱した『アラタンゲレト・ハーンの勇士アブラグチョロン』、モーイホン・ホールチの説唱した『傑出した好漢アリヤフー』、バラジニマ・ホールチの説唱した『アスリ・ツァガン・ハイチン』などの英雄叙事詩（脚本）が民衆に歓迎された。

そこでモンゴル人が生活している各国および各地域で流行っていたトゥリ、即ち英雄叙事詩は、その地域に特有の文化要素および社会環境の影響を受けて次第に地域化された一方で、東部モンゴル地区では、英雄叙事詩のことをマングスインウリゲルと称し、もともとのトゥリとは、少し異なる説唱芸術として流行るようになった。その相違点の事例を挙げると、伴奏する楽器に顕著に現れている。周知のように、トゥリを語る際には、トゥブシュリという撥弦楽器を使うのが通常であるが、マングスインウリゲルを語るときには、チョールという擦弦楽器を使うので、トゥリ＝マングスインウリゲルとは言い難い。

3. 2 マングスインウリゲルの形成と衰退

古い時代からモンゴルの各部落・部族の中で流行っていたトゥリは、多文化が融合する東部モンゴル地区に伝来して後、この地域に特有の半遊牧半農耕文化の影響を受けて、古代英雄叙事詩とは異なるマングスインウリゲルという説唱芸術として形成された。このマングスインウリゲルは、上述した伴奏楽器がトゥリと異なるだけでなく、具体的な内容・形式・風格もトゥリとは遠く離れているというのが、モンゴル英雄叙事詩研究の専門家であるリンチンドルジを主とする研究

者が強調する点である。

しかし、別の研究者は、マングスインウリゲルがトゥリと同源異流の説唱芸術であるが、ただ東部モンゴル地区ではトゥリと呼ばずに、マングスインウリゲルと呼ぶだけの違いであると強調している。勿論、筆者は東部モンゴル地区であるモンゴルジン旗、ジャルート旗、ヒンガン盟などの地域でフィールド調査を実施すると、現地の民間芸人たちがチョールという擦弦楽器を自ら弾いて、古代英雄叙事詩を語る上演方式を「マングスインウリゲル」と呼んでいたもので、科尔沁を主とする東部モンゴル地区ではトゥリ＝マングスインウリゲルという言い方が成立していると言える。

筆者は、前述したリンチンドルジの観点到賛成する。理由の第一は、トゥリとマングスインウリゲルは発生した時期が異なる点がある。周知のように、東部モンゴル地区の民間芸人、厳密に言えばチョールチ（潮尔沁）たちがチョールという擦弦楽器を弾きながらマングスインウリゲルを語る前に、その地域で活躍する民間芸人はすべてトゥリ、即ち英雄叙事詩を語っていた。このような状況から見れば、トゥリはマングスインウリゲルより前の時代に発生し、マングスインウリゲルが形成されても、東部モンゴル地区を含む各モンゴル地区でトゥリも民間芸人の説唱によって語り続けられていたことが確認できる。

第二は、トゥリとウリゲルの2つ名詞が異なる点が挙げられる。前述したように、「トゥリ」とは「(名詞) <文>①史詩、英雄史詩(史詩、英雄叙事詩)、②历史故事、叙事詩(歴史故事、叙事詩)」のことを指し、「ウリゲル」とは「(名) ①<文>故事; ②<曲艺>书(名詞、①文学「故事」;「芸能」書)」を指している。このような解説をもとにすると、トゥリは韻文体の史詩および叙事詩のことを指すので、発生した時代を遡ると古代までに辿り着くことができるが、逆にウリゲルは、主に口頭文学を題材とする脚本を語る際に使っていたので、ウリゲルはトゥリが定着した後に形成されたことが明らかになったと言える。

ここまで論を進めてきたが、「ᠮᠠᠩᠭᠤ ᠰᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠦ」(マングスインウリゲル)という言葉はどのような意味合いであり、どのような上演形式を言うのかという問いに答えるためには、まず、モンゴル語の名詞「ᠮᠠᠩᠭᠤ」(マングス)の意味を明確する必要がある。『蒙漢辞書』を調べると、「ᠮᠠᠩᠭᠤ(名) <神>妖魔、魔怪」の意味を持つと解説していた。この解説によると、モンゴル語のマングスという言葉は、日本

語に訳すと、悪魔・怪物・魍魎・妖怪変化などの言葉に相当することが分かる。

マングスは悪魔・怪物・魍魎・妖怪変化などの意味を持っていることが明確になったうえで、前述したウリゲルという言葉の意味を振り返ると、マングスインウリゲルとは、この説唱芸術の語り手であるチョールチ（潮尔沁）、あるいは、マングスチ（蟒古斯沁）が、擦弦楽器のチョールを自ら弾いて、長編の英雄叙事詩および長編の歴史故事を語る上演方式を指していると定義しても良いではないかと考えられる。しかし、残念なことには、現存の史料および先行研究の研究成果を整理すると、マングスインウリゲルという説唱芸術は、どのような時代背景のもとで発生して、民間芸人が語るようになったのかはまだ明らかになっていない。確定できるのは、18世紀の末期から19世紀の初期にかけて、広大な東部モンゴル地区でマングスチ（蟒古斯沁）がチョールを弾きながら遊芸してマングスインウリゲルを語っていたことが現地調査によって明らかになったということである。

そして、マングスインウリゲルは発生した後、速やかに各モンゴル地区で伝播したので、当時の東部モンゴル地区では、トゥリのような古代英雄叙事詩より、マングスインウリゲルが歓迎される時代を迎えた。例えば、『ホールチの揺籃—ジャルトー』（胡尔齐摇籃—扎魯特—）の記載によると、東部モンゴル地区でマングスチとホールチとして名が高まったチュイバン（朝玉邦）は、当該時期に有名だったナランバスル（那仁巴斯尔）およびゲンデウン（亘敦）に拝師して、マングスインウリゲルを学んだという。

また、前述したように、リンチンドルジ（仁欽道古吉）の『モンゴル英雄叙事詩源流』の記載によると、パジェ（琵琶）・ホールチの演唱した『アラタンゲレット・ハーンの勇士アブラグチョロン』（阿拉坦格日勒图汗的勇士阿布拉古朝論）、モーイホン（毛依罕）・ホールチの説唱した『傑出した好漢アリヤフー』（傑出的好漢阿日亜夫）、バラジニマ（巴拉吉尼瑪）・ホールチの説唱した『アスリ・ツァガン・ハイチン』（阿斯尔查干海青）などの、マングス（悪魔）を鎮圧する物語が語られていたという記録があるので、マングスインウリゲルは20世紀の50年から80年までは、さらに演唱されていたことが確認できる。

しかし、ホーリンウリゲルの発展過程から見ると、マングスインウリゲルが繁栄していた段階で、ベンスンウリゲルという蒙漢文化が接触した後の産物が登場してきた。このベンスンウリゲルの出現によって、マングスインウリゲルの視聴

者は急減し、マングスチ（蟒古斯沁）の演出する場も失われたので、マングスインウリゲルは次第に歴史舞台から離れてしまい、マングスチたちは別に生計を維持しなければならない状況となった。

3. 3 ベンスンウリゲルの出現と役割

ベンスンウリゲル（本森烏力格尔）とは、モンゴル語に翻訳および写本化された漢族の古典小説のことを指す。漢語で「本子」(BenZi)と発音するこの言葉は、モンゴル語で「ベンス」と読むので、モンゴル文人の翻訳および写本化した漢語の古典小説のテキストはすべて「ベンスンウリゲル」と呼ぶようになった。この「ベンスンウリゲル」というジャンルは、清朝政権の中後期に形成されて以来、東部モンゴル地区で広く伝播し、モンゴル族の人々が受け入れたので、長い間に民間でこのように呼んできた。そして、この「ベンスンウリゲル」が形成された時期を遡ると、清朝政権の中後期までに辿り着けるのである。

満州政権が成立した初期において、清朝の政府はモンゴル人を統治するため、モンゴルの諸部族・部落を「アIMUMグとホシュ」（盟と旗）の行政制度により分散し、次第にモンゴル人の勢力は衰えた。特に、清朝・雍正帝（1722～1735）が政権を握った第2年（1724）には、山東と河北地方で例年早魃災害が起こって民衆は生活が困難になり、各地の人々の不満が募ってきた。それゆえ、清朝のモンゴル・チベットの事物を管理する理藩院により、多くのモンゴル人が生活するジョソト盟（卓索図盟）・ジリム盟（哲里木盟）・ジョーオダ盟（昭烏達盟）などの東部モンゴル地区を対象に、「モンゴル人の土地を借りて、漢人の難民を養成する「借地養民」という移民政策」を作り上げた。その時から無数の漢人が次々にモンゴル地区に入ってきて、次第に東部モンゴル地区では、モンゴル人と漢人が共に生産・労作するという事になった。

このようにして多くの漢人がモンゴル地区に入り込んだことに伴い、モンゴル人が漢人と交流する機会が増え、モンゴル人は漢語を学び、漢人はモンゴル語を学ぶようになった。もともとモンゴル人は、遊牧文化および畜牧経済を重視していたが、漢人の移住によって、モンゴル人は農耕文化と農業経済を重視するようになり、東部モンゴル地区、特にジョソト盟地区に住むモンゴル人の中では、次第にモンゴル語と漢語を話し、半遊牧半農耕の生産方式を営むようになった。

その結果、漢語とモンゴル語に精通するモンゴル文人は、漢語で書かれた長編歴史小説および古典文学の作品をモンゴル語で翻訳・写本化しはじめた。

この時期の翻訳および写本化する作業は、主にジョソト盟のトウメット左旗（土黙特左旗、即ちモンゴルジン旗）とトウメット右旗（土黙特右旗、朝陽一帯）を中心に行われたので、有名なラマ僧の文人と翻訳家が徐々に出現した。例えば、近代のモンゴル文学史上で翻訳家・評論家として名が知られているハスポ（哈斯宝）は、漢族の古典文学の名作である『紅樓夢』をお手本として、多量の漢文文献と『紅樓夢』のテキストを比較し、モンゴル語で『新訳紅樓夢』という著作を出版した。清朝・乾清門の護衛・アラナ（阿喇納）は、康熙帝60年（1721）に漢族の古典名作である『西遊記』をモンゴル文に翻訳した。

また、その時代にモンゴル語に翻訳・写本化された漢語作品は、上記の『紅樓夢』と『西遊記』以外に、『三国演義』、『水滸伝』、『聊斎志異』などの歴史を題材とする名作とともに、志怪伝奇小説も翻訳・写本化された。ここで説明する必要があるのは、清朝政権の中後期に蒙漢文化の接触および融合によって、漢族の章回体小説が東部モンゴル地区に流入してきたので、次第に漢族の章回体小説の文体および書き方を参考にし、さらにモンゴル民族に特有のトゥリ、即ち英雄叙事詩にしばしば登場する英雄人物をもとにした「モンゴル風な章回体小説」が創作されるようになった。

例えば、モンゴル民族の有名な文学家・詩人・ホールチ（語り手）・モンゴル語の巨匠・ラマ僧の文人であるエンケテグス（恩赫特古斯）は、ジョソト盟・トウメット左旗のゲゲンスム（瑞應寺）で働いていたとき、ホーリンウリゲルの古代書目である長編英雄叙事詩『ゲセル・ハーン物語』（格斯尔汗の烏力格尔）と『ジャンガル・ハーン』（江格尔汗の烏力格尔）にしばしば登場する英雄人物をモデルとし、さらに、上述した漢族の長編演義小説である『隋唐演義』、『三国演義』、『水滸伝』などの作品を参考にして、これらの長編歴史小説の表現・表記を使って、モンゴル英雄の性格・戦争の状態・キャラクターのイメージを描写する長編歴史小説シリーズ作品『興唐五伝』を創作した。

このような歴史演義小説、志怪伝奇小説、モンゴル風な章回体小説は、ラマ僧の文人および翻訳家の翻訳と写本化によって、モンゴル民衆が閲覧できる書籍と作品は徐々に増えてきたので、民衆はモンゴル民族の英雄叙事詩を楽しむほか、

漢族およびほかの異民族の歴史と文化を知ることが可能となった。特に、エンケテグスの創作した『興唐五伝』という作品は、主に中原唐朝の忠臣と奸臣の間に発生した事件を手掛かりに描写したが、その英雄人物の性格・容貌・姿勢などはすべてモンゴル人らしく書かれていたので、モンゴル族の人々はこの小説からモンゴルの英雄人物の姿を見て、漢族の歴史と文化を知ることになった。

これらの作品は、モンゴル語で翻訳・創作・写本化された初期には、漢文の読める文人が文字ごとに大声で朗読していたが、長い間に同じ作業がずっと続けると、多くの人はこのような形式に嫌気が出てきた。文人は、このような悪状況を改善するために、音楽を入れて作品を演唱し始めたので、嫌がっていた人々も戻ってきて真面目に聞くようになった。その時から、モンゴル人の中ではあまり人気がなかった漢文の作品が歓迎されるとともに、文人の語る各種のウリゲル（物語）を聴くことが習慣として定着したので、伝統芸能のホーリンウリゲルが定型される条件が満たされ、現在のような吟遊詩人のホールチが、低音のドウリボン・ウタスト・ホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式に定型した。

4. 終わりに

本稿では、まず、これまで研究者の提唱によって形成された5つの起源説を整理・検討した上で、ホールチとする筆者からホーリンウリゲルの起源時期について私見を述べた。次に、現在までのホーリンウリゲル研究では、あまりに使われていない郷土資料を用いて、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルが12世紀から13世紀に淵源を持つ事実を論証した。最後には、多量の史料を使って、ホーリンウリゲルの発展経緯を分析しながら、三つの段階を経てから現在のような上演形式に定型した事実を明確にした。

【注釈】

(1) ホーリンウリゲルとは、「吟遊詩人の「ホールチ」（語り手）が、自らモンゴル民族に特有の伝統楽器である「低音のドウリボン・ウタスト・ホール」（四胡と四弦琴）を弾いて、モンゴルの民謡民歌とホルボー（好来宝）およびウリゲルトドー（叙事民歌）が語れるようになった上で、モンゴル文字で創作および翻訳された長編（モンゴル族と漢族両方の作品が含まれている）の口頭文学と書面文学

を選び取って芸術的に構想・加工して、さらに低音のドウリボン・ウタスト・ホールが持つ様々な技法（主に弓を引っ張り、弦を指ではじく、弓で共鳴箱を叩くなど）を駆使しながら、説唱する脚本・底本の内容と粗筋をモノローグ（独白）および説と唱（ホールチの芸術風格や流派によって説（ハナシ）や唱（ウタウ）する重点が異なる）などの方法を通して、聞き手の聴衆たちに完全な状態で伝える総合的な上演形式を指している。

(2) 現在の学界においては、モンゴル語の「*Һоорчи*」（語り手）という言葉は、漢語で「胡尔齐」「胡尔沁説書芸人」「胡尔奇」「胡尔沁」などの異なる形で表記されているが、本稿ではモンゴル語の発音に従って、「ホールチ」と統一して表記する。

【参考文献】

日本語文献

蒙古貞夫「ホーリンウリゲルの脚本・興唐五伝に関する一考察」（日本語版）、研究代表者：石井正己、『令和元年度広域科学教科教育学研究経費成果報告書 北海道・東北および沖縄・九州を視野に入れた歴史認識の構築と教材開発に関する戦略的研究』、東京学芸大学、2020年。

村上正二（訳注）：『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』（日本語版）、平凡社・東洋文庫、第1部は1970年、第2部は1972年、第3部は2006年に出版された。

楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）：「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」（日本語版）、『東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科学学校教育学研究論集』、第40号、2019年。

中国語文献

亨寧・哈士綸「著」、徐孝祥「訳」：『蒙古的人和神』（漢語版）、新疆人民出版社、1999年。

拉施特・著、「イラン」、余大均・周建奇・訳：『史集』（漢語版）、商務印書館、1997年、第1巻・第2分冊。

秦塔娜、特・塔日巴：「关于旧蒙古説書の起源及其他」（漢語版）、民族文学研

